

陸奥国分寺・国分尼寺関係略年表

時代	年代	主なできごと
飛鳥	645	大化改新、このころ陸奥国が置かれる
	7世紀後半	郡山(太白区)にⅠ期官衙が造営される
	7世紀末	郡山(太白区)にⅡ期官衙が造営され、付属寺院が建立される
奈良	710	平城京に遷都を行う
	724	陸奥国府多賀城が築かれる
	741～ 50年代	陸奥国分寺・陸奥国分尼寺が建立される ●台原・小田原丘陵で築業が栄え国分寺・国分尼寺・多賀城などの瓦が焼かれる
	780	伊治公昔麻呂が反乱をおこし、多賀城が焼失する
平安	794	平安京に遷都を行う
	802	鎮守府を多賀城から胆沢城へ移す
	869	陸奥国に大地震があり、国分寺が被害を受け、大規模な修復をする
	934	陸奥国分寺七重塔、雷火で焼失する
	1080	国分尼寺倒壊する
	1124 1189	中尊寺金色堂が建立される ●奥州藤原氏栄える 源頼朝、奥州藤原氏を滅ぼす(国分頼館(榴ヶ岡)などで合戦)
鎌倉	1192	源頼朝、征夷大将軍となる・伊沢(留守)氏、葛西氏が奥州に赴任する 国分寺西院の僧、名取新宮寺一切経の書写を行う 国分寺で十二神将立像が造られる
	南北朝 室町	1334 1354
江戸	1600	関ヶ原の戦い 政宗、仙台城の縄張りを始める
	1607	大崎八幡宮、陸奥国分寺薬師堂が完成する
明治	1868	明治維新



陸奥国分尼寺跡航空写真(赤：国史跡指定地区)

写真・図提供協力：仙台市史編さん室・岩波書店

発行／仙台市教育委員会 ☎ 261-1111 発行日／平成 16 年 2 月



史跡陸奥国分寺・国分尼寺跡

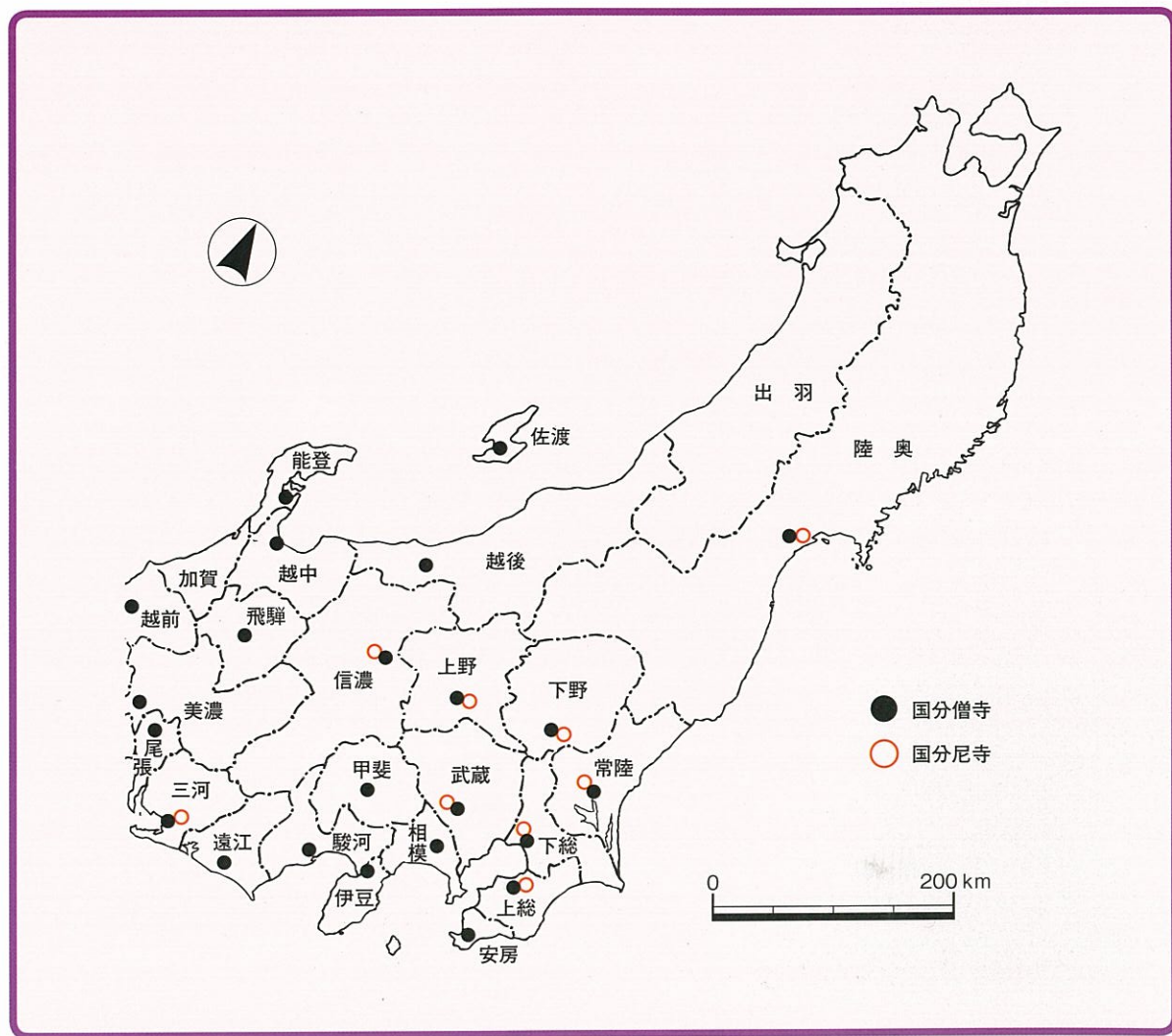
— よみがえる古代の寺院 —

仙台市教育委員会



1 陸奥国分寺と諸国の国分寺・東大寺

八世紀の中ごろ、時の聖武天皇は、流行した疫病や社会不安をとりのぞき、鎮護国家を祈るため、国ごとに国分二寺を造ることを命じました。それは、天平13年(741)のこととされています。諸国に僧寺である国分寺と尼寺である国分尼寺の二ヶ寺を置き、国分寺の正式名称は「金光明四天王護国之寺」、国分尼寺は「法華滅罪之寺」と称し、奈良の東大寺を総国分寺、法華寺を総国分尼寺と定めました。当時、日本は60余の国に分けられており、僧寺、尼寺あわせて120余の寺の造営が始まっていたこととなります。宮城県は陸奥国に属し、陸奥国分寺・国分尼寺は最も北にある寺となりました。両寺院の瓦葺き建物群は、周辺の竪穴住居に住み暮らす農民たちの前にそびえ立ち、鎮護国家のシンボルとして圧倒的な威容を誇っていたことでしょう。八世紀のおわりには62ヶ国、124寺あったと伝えられる国分二寺のうち今日まで、70ヶ寺近くが発掘調査され、伽藍配置等がわかりつつありますが、いまだにその所在地すら推定できていない寺もあります。



国分寺・国分尼寺所在図(東日本)

表紙：陸奥国分寺跡航空写真と出土鬼板(復元瓦)

2 発掘調査により明らかになった陸奥国分寺・国分尼寺跡

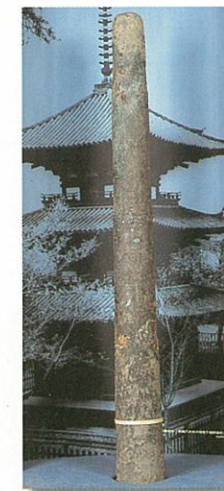
(1) 陸奥国分寺跡の発掘調査

陸奥国分寺跡は、仙台市若林区木ノ下二・三丁目にあり、大正11年(1922)に国史跡として指定されました。

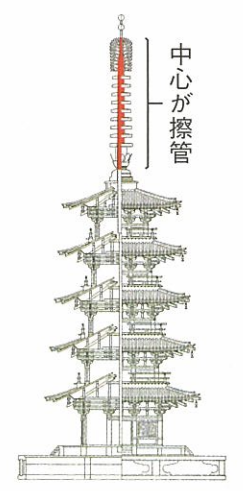
太平洋戦争後、各地でそれぞれの国分寺跡が研究の対象になり発掘調査が実施されたのを機に、仙台でも陸奥国分寺の発掘調査を昭和30年(1955)から34年(1959)までの5ヶ年にわたり実施しました。このような大規模調査は当時としても例がなく、判明した調査成果も極めて重要かつ大きな意義をもつものでした。



土中につきささって発見された擦管



七重塔擦管



五重塔モデル



陸奥国分寺塔跡基壇発掘状況

調査の結果、南大門、中門、金堂（本尊の仏像を安置した建物）、講堂（僧が説経や講義など日々の勉強をした建物）、僧房（僧が日常生活をおくる建物）が一直線に並び、中門と金堂は回廊でつながっていることがわかりました。さらに、金堂の東には周囲に回廊をめぐる七重塔がありました。国分寺は東西800尺（約242m）、南北も800尺もしくはそれ以上の築地塀（土をつき固めてつくった土塀）で囲まれた大規模な寺院であったことがわかりました。また、その後の調査で、東辺築地塀と東門も判明し、諸国の国分寺の中で、もっとも詳細に寺域や伽藍配置が確認できた例となりました。現在、主要建物の位置には柱位置に礎石（柱の土台としてすえる石）が復元されて置かれ、往時をしのぶことができます。また、現在は講堂跡の上には薬師堂が、南大門跡の上には仁王門が建てられています。

陸奥国分寺・国分尼寺の正確な創建年代は不明ですが、発見されたもっとも古い瓦類と多賀城跡から出土した瓦群との比較検討から、天平13年(741)以降、およそ750年代ではないかと考えられています。



陸奥国分寺跡復元模型



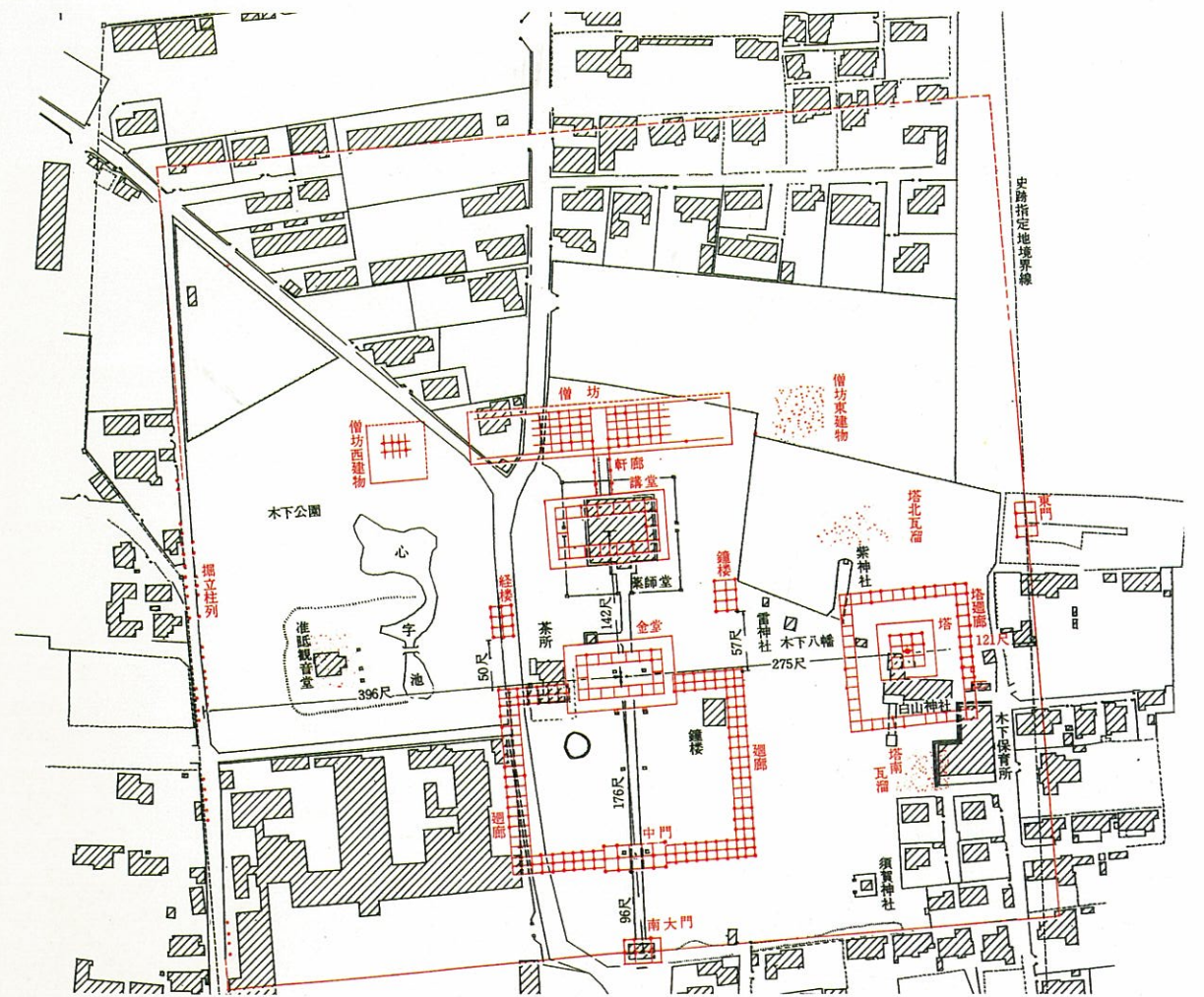
中門と金堂を結ぶ回廊跡



七重塔心礎石（右側）



陸奥国分寺跡と国分尼寺跡航空写真 黄：国史跡指定範囲 薄黄：中枢部範囲（尼寺は推定範囲）



陸奥国分寺跡伽藍配置図（昭和36年原図）

(2) 陸奥国分尼寺跡の発掘調査

陸奥国分尼寺跡は、仙台市若林区白萩町、宮城野区宮千代の両区にわたり、昭和23年(1948)に金堂跡とされた一角が国史跡として指定されました。

中心部と考えられる一角には、かつて「観音塚」と呼ばれる、礎石が露出した土壇があり、昭和39年(1964)に発掘調査が行われました。調査の結果、南面する桁行(建物の長さ)

5間、梁行(建物の幅)4間(東西9.85m、南北8.48m)の礎石の上に柱を立てる工法の建物跡が確認され、国分尼寺の金堂跡と考えられました。土壇はこの金堂跡の基壇で、版築(土を突き固めて積み上げていく工法)により造られていました。出土遺物は、陸奥国分寺跡出土の瓦と同様の瓦が大半をしめ、両寺がほぼ同じ時期に造られたことが調査成果を比較した結果わかりました。

近年行われた国史跡指定地の北側での調査で、直径30cmもの柱を用いた東西長45m以上の大規模な堀立柱建物跡などが発見され、この建物は尼房(尼僧が日常生活をおくる建物)と推定されました。この建物は部分的な調査で全容はわかりにくいですが、右の写真は推定尼房建物跡の南側柱列の一部です。また、この他にも多量の土器を伴う寺院に関連するとみられる住居跡なども発見されました。このことから国分尼寺跡は指定地だけでなく周辺にも広がっており、大伽藍が広がっていたものと考えられるようになりました。



陸奥国分尼寺跡推定金堂跡(南より)



推定尼房跡南側柱列(東より)

(3) 陸奥国分寺と国分尼寺

全国で国分寺・国分尼寺が造営されましたが、陸奥国にも国分寺と尼寺の二ヶ寺が造営されました。どのような経緯で現在の地が選ばれたのかは今のところわかっていません。いずれにしても二ヶ寺はそう離れることなく(約500m)西に国分寺、東に国分尼寺と並ぶように造営されました。早くから発掘調査が実施され、寺域全体の規模や伽藍配置がよくわかっている国分寺に対し、寺域はおろか伽藍の様子さえ全くつかみ得ない国分尼寺でしたが、近年の調査により、建物群や推定寺域内の様子が少しずつわかってきました。



陸奥国分寺跡出土の軒瓦：仙台市史特別編2考古資料より

3 陸奥国分寺と陸奥国府多賀城

陸奥国全体を治める行政府(国府)多賀城は現在の多賀城市市川の地に神亀元年(724)に置かれたとされています。他の国々では、国府と国分寺・国分尼寺などは比較的近接して造られることが多いのですが、陸奥国分寺と多賀城はかなりの距離(約10km)があります。これはおそらく、多賀城が通常の国府としての業務のほか、北方に住む蝦夷を意識して北方への構えの意味が大きかったのも一つの理由でしょう。また、国分寺のすぐ西には現在も「東街道」の地名の名残があります。東街道は古代の幹線道路であった東山道とは直接の関係はないにしても、古くからの道が付近を通



宮城郡・名取郡とその周辺：仙台市史通史編2古代中世より

り、国分寺は東山道にも隣接していたと考えられます。国分寺南側の南小泉地区には奈良時代の大規模な集落が広がっていたことが、発掘調査でわかっており、南東部一帯に広がる水田地帯を臨む、広大な平坦地を選ぶという意味ではこの木ノ下地区が最適だったのではないかと考えられます。

4 薬師堂と仁王門

江戸時代の初め、伊達政宗が慶長12年(1607)に陸奥国分寺を再興したのが現在の薬師堂です。この薬師堂を建立した場所が、陸奥国分寺跡の講堂の真上であったことが、発掘の結果わかっています。薬師堂の建物は江戸初期の貴重な建造物として国の有形重要文化財に指定されています。

仁王門もこの薬師堂造営の際に同時に建立されたものと考えられています。国分寺南大門の礎石を転用して、南大門の真上に同様形式の八脚門を建立したものとみられますが、奈良時代の南大門より小規模の門となっています。この仁王門も薬師堂と同様、貴重な建造物として宮城県指定有形文化財となっています。

陸奥国分寺と薬師堂・仁王門の造営の間には約850年という時の隔たりがありますが、このように伊達政宗による再興は、奈良時代以来の重要な地域の文化や伝統を仙台藩の礎のひとつとしたともいえるでしょう。



陸奥国分寺薬師堂(南より)



陸奥国分寺薬師堂仁王門(南より)

5 保存と活用

これまで述べたように陸奥国分寺跡は発掘調査によって、全国の国分寺の中でも寺院の様子が見えやすかった例の一つであり、しかも地中には建物跡などが非常に良く保存されていることが明らかになっています。

また、陸奥国分尼寺跡についても、整備されている金堂跡の周辺に、尼寺に関連する大規模な建物が存在することが、近年の発掘調査によりわかってきています。

そして、国分寺境内の薬師堂(国指定重要文化財)、仁王門・白山神社本殿(県指定有形文化財)、芭蕉句碑・大淀三千風供養碑(市指定有形文化財)などは、江戸時代の景観を今に伝えていきます。

このように陸奥国分寺・国分尼寺跡は奈良時代から江戸時代に至る仙台市の歴史と風土を代表する史跡です。

今後は、史跡としての価値を保全し、将来に向けて継承するために土地の公有化事業を継続し、発掘調査の成果を基に、仙台市の歴史と風土を体感できる市民のいこいの場となるような史跡としての整備を進めてまいります。

